

私たち日本人にとって、8月という月は特別な月です。それゆえ、日本基督教団では、8月の最初の主日を平和聖日として行事暦に定めているわけです。そして、私たちがこの独自のものを定めたのは、日本というこの国と、私たちキリスト者とが互いに歴史を共有するものであるからです。そこで、この日、その私たちに与えられた御言葉が「あなたがたは地の塩である。あなたがたは世の光である」というイエス様のお言葉です。そして、そのイエス様がそのように語るのには、「人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなた方の天の父を崇めるようになるためである」との、この目的に則ってのことでもありました。それゆえ、この「地の塩、世の光」とのイエス様のお言葉を、私たちの誰もが心に深く留めることになるのです。つまり、「地の塩、世の光」あらねばならないと、それゆえ、私たちの中にこの御言葉を知らないものは誰もいない、それが、この「地の塩、世の光」と言われている御言葉でもあるのでしょうか。

ただ、誰もが知っているこの御言葉ではありますが、その受け止め方については、意見が真二つに分かれているようにも思うのです。そして、多くの場合、この御言葉を自分事として受け止めきれずにいるのが私たちであるように思います。つまり、直ぐ手の届くところにこの御言葉を置いてはいない、誰かがやるだろうと、自分から遠いところに置いてしまっている、それが私たち多くの受け止め方なのではないでしょうか。ただし、それは、私たちが御言葉に対して不誠実だからではありません。御言葉に対して誠実であろうとするがゆえに、この「地の塩、世の光」という御言葉を遠ざけてしまう、いや、遠ざけざるを得ない。それは、イエス様が「人々が、あなた方の立派な行いを見て、あなた方の天の父を崇められるようになるためである」と語るように、そう言われていることに真面目に、真剣に向き合った結果、主に申し訳が立たない、そのような思いに駆られているのが私たちであるからです。ですから、そういう思いを抱えつつ、毎週の御前に集められているのが私たちでもあるのでしょうか。

しかし、申し訳ない、申し訳ないと反省ばかりではなかなか前に進むことはできません。逆に、できるわけではないだろうと開き直るだけでも進歩はありません。それゆえ、落ち込む人と開き直る人との間には共通項を見出すことができます。それは、それぞれがこのイエス様のお言葉を「自分にはできない、難しい」と思っているということです。すると、そこで、何が起こるのか。反省しきりの人たちはそれを「しよう」と一生懸命に頑張ろうとする、ところが、開き直る人たちはやっても無駄とばかりに「しよう」としない。そして、その人たちが一緒にいるわけですから、真面目な人は開き直る人たちを見て憤る、また、開き直る人たちは、自分を棚上げし、高飛車に語る人々にげんなりとさせられる、そういうことが私たちの中で起こってくるわけです。けれども、それがこの「地の塩、世の光」とイエス様が仰る言葉の力でもあるのでしょうか。このモヤモヤした中でより輝きを増すのが、このイエス様の「地の塩、世の光」という御言葉でもあるのです。それは、このモヤっとした状況をそのままいいとは誰も思っていないからです。ですから、そこでイエス様のこの言葉を互いに深く自覚させられた私たちは、この御言葉の上に立ちたい、立たねばと思うのです。そうすれば、きっと、私たちの思い煩いは雲散霧消するに違いない、そう思うからです。従って、私たちの誰もがこの御言葉をよく知っているのはそのためでもあります。しかし、それゆえにまた、今度はこの「地の塩、世の光」とのイエス様のお言葉を自分自身の外側に追いやってしまう、いや、追いやらざるを得ないことにもなるのです。それは、この御言葉が自分の身の丈に合っていないことを次に深く知らされることになるからです。それは、自分の信仰がSサイズでしかないことを知ったということでもあります。それは、イエス様が仰るようには立派で素晴らしい振る舞いなどできるはずもないからです。

それゆえ、身の丈に合っていないこの感じ方は私たち多くの共通認識であると言えるのですが、このことはつまり、この御言葉は私たちが着ていて気持

ちのいいものではないというこです。けれど、そこで語られてい葉は美しく、それゆえ、多くの人が憧れを抱くものでもあるのです。ですから、高名な信仰者曰く、この「地の塩、世の光」という言葉は、宗教、道徳に心をもち、誰が憧れを持つ葉でもあそうです。つまり、そういう意味での普遍性と崇高さを兼ね備えているのがこのイエス様のお言葉であるということです。しかし、憧れが憧れのまま終わるだけではつまらない、また、素晴らしい、立派だ、と美辞麗句を並べ立てるだけでは、結局は、この「地の塩、世の光」という言葉に私たちが幻滅しているにすぎないというこのことにもなる。なぜなら、このイエス様のお言葉に対する美辞麗句がそうした自分の気持ちで覆い隠そうとしたことであるとしたら、それ自体が、この「地の塩、世の光」とこのイエス様の御言葉を私たちが自分の外側に置いてしまっている何よりの証拠であるからです。ただし、それには理由がないことではありません。それは、この御言葉によって、私たちがもうこれ以上傷つきたくないと思うからです。つまり、自分自身の真実の姿に触れたくないから、それゆえ、その自分を自分で守ろうとしてこの御言葉を自分の外に置こうとしてしまうわけです。それは、やってもやってもできないものだから、なろうとしても決して叶えられないものではないから、こうして私たちがこの御言葉との距離の取り方を学び取ることになるのです。ですから、私たちのそうした受け止め方がもし正しいものであるとしたら、この「地の塩、世の光」というイエス様の言葉は、私たちを二重の意味で苦しめる言葉ということになります。身の丈に合っていないと脇に置いてそのことに傷つき、しかし、その魅力的な姿に心引かれ、思わず美辞麗句を並べてしまいう自身にまた傷つく、ですから、それでは、このイエス様のお言葉は、多くの人々にとって、祝福ではなく、結局は呪いの言葉となってしまいます。つまり、私たちに希望を与えるために語るものではなく、私たちを落ち込ませ、傷つけ、あれもこれもすべてダメ、ダメダメダメと、そう言いたいがためにここでこのようなことをイエス様は仰っている、そういうことになってしまいうということですから、それがイエス様のお考えであるとしたら、「地の塩、世の光」と言われている私たちは不幸の極みに置かれていることになり

が御言葉が語る真実であり、その上で私たちが、それが真実であると語っているとしたら、私たちが偽りを語っていることになってしまいます。しかし、もちろん、そうではない、ではそうではないなら、どういうことなのか、それを知らぬには、この「地の塩、世の光」とこの言葉をイエス様がどこでどういう思いをもつて語っているのか、それを知ることが大切なのです。それは、この「地の塩、世の光」というイエス様のお言葉を巡っての私たちの共通認識がそれを忘れたところから生じているものでもあるからです。

「あなたがたは地の塩である」、「あなたがたは世の光である」、私たちに向かってイエス様がこう語るのは、地に生きる私たち、世に置かれている私たち、つまり、イエス様の御前に集められ、こうしてイエス様と共に生きる私たちは、塩であり、光であるということです。このことはつまり、私たちの思いや考えによってこの事実を変えることなど到底できないということなのです。なぜなら、塩であり、光であるということが私たちキリスト者の本性であり、それ以上でもなければ、それ以下でもないからです。ですから、私たちが地の塩であり、世の光であると言われていることは、卑近な例で申せば、犬がワンワン、猫がニャー、カエルがゲロゲロと鳴くに等しいものであるということです。そして、私たちがこの私たち固有の声を自然と発することができるのは、私たちがイエス様と共にいるからです。ところが、私たちはそれを自分の力だけで出そうと「する」、出さない「いけない」もの、出すこと「できる」もの、そう思い込んでしまっているのです。そして、私たちがそう思い、一生懸命に何かをしようとするのは、イエス様が一緒にいてくださっていることを知っているからです。では、もう一度伺うのですが、その私たちにとって、イエス様が私たちと一緒にいてくださっていることは不幸なことなのでしょうか。私たちを不幸にするために、イエス様はここでこのようなことを仰っているのでしょうか。

イエス様が私たちに向かって、「あなたがたは地の塩である。あなたがたは世の光である」、そのように語りかけておられるのは次の理由からです。それは、イエス様と共に地にあり、世に生きる私たちは、この「イエス様と共に」あるがゆえに「幸い」なものとしてされているからです。そして、この幸いであり

それは、私たちが地の塩であり、世の光であるように、これについても動かしようはありません。つまり、イエス様と共にある私たちが幸いとイエス様が仰ることは、それが鏡に映るそのままたちであるということなのです。ですから、それがあるままの私たちであるわけですから、私たちは、幸せになろうとか、幸せにならねばとか、もちろん、幸せになりたいとか、そのように考える必要はありません。イエス様が仰ることは、私たちがなろうとすることではないからです。そのままのすべてが幸いである、それは、イエス様と一緒に私たちがいるからです。ですから、それは私たちに喰うほどお金があろうがなかろうが関係ありません。頭が良からうが悪からうが、あるいは、性格が良からうが悪からうが、イエス様が私たちから離れることはありません。イエス様が私たちのために十字架にかかり、陰府にまで降られたことからも分かるように、私たちがどこに置かれるようが、どういう所に生きていようが、神様の恵みであるイエス様は、私たちの後をどこまでも追いかけてきて一緒にいてくださろうとしているのです。まただから、聖書の御言葉は「命のある限り、恵みと慈しみはいつも私を追う」と、信仰者誰もが味わい知るこの経験を言葉にしているのです。ですから、そういうものかと言うことが分かれば、この「地の塩、世の光」という言葉をこれ以上掘り下げる必要もなく、またごてごてと何かを盛ったりする必要もありません。なぜなら、塩であり、光であるということ

は、イエス様がそう仰っている以上、天地創造の秩序に基づくものでもあるからです。まただから、私たちはこの幸いな自分自身のあり方を自ずとこの世界で現していくことになるのです。

ところが、その私たちが「地の塩、世の光」と言われることに強い抵抗を感じて、この御言葉を遠ざけてしまうのはどうしてなのか。その理由は簡単です。イエス様と共にあるがゆえの幸いを誤解するか、また忘れていたからです。誤解し、忘れていたから自分は不幸だと決めつけてしまうのです。そして、その理由については自分が不信仰だから、自分には何もできないからだと、そのように決めつけることにもなるのです。ですから、こうしよう、こうしたい、こうしななければ、これができなければとの決めつけはそれゆえのことでもありますが、それは、イエス様が幸いだと仰っていることを幸いになるための条件のように考え

ているからです。けれども、この誤解も私たちにあっては無意味なものではなく必要なものなのです。なぜなら、誤解に気がつけばこそ、真実への気づきが与えられ、また、そもそもこのところで言えれば、誤解や躓き、失敗を通して経験させられるものが神様の恵みであり、イエス様が仰る幸いというものでもあるからです。

では、気づきが与えられるためにはどうすればいいのか、それは、イエス様が仰る幸いを私たちが考える不幸の対極に置かないことです。つまり、何もできない、何もない、ダメダメづくしの対極あるものを私たちは幸せと考えているのですが、先ほども申しましたように、イエス様が仰る幸いとは私たちの本性であって、それ以上でもそれ以下でもないのです。私たちがどれほど優れていようが優れていまいが、イエス様はその私たちといつも一緒にいてくださっている、それとも、ただ一緒にいるだけでなく、その私たちを御国まで導いてくださろうとしている、だから、幸いだイエス様はそう仰るのです。ところが、私たちはこの幸いを不幸の対極に置いて眺めてしまう。だから、あれもしたい、これもしたい、全部したいし、全部しなければとそう考えてしまう、それは、そうでないと幸せになれないと思いついでいるからです。けれども、自分の思うことをすべて実現できる者がどれだけいるのでしょうか。多くの人が躓きを覚えるのはそれゆえのことでもありますが、それがためにまた、イエス様の言葉を自分の外に置こうとしてしまうのです。けれども、イエス様の言葉は外に置いて眺めるために私たちに与えられているではありません。御言葉は、言葉自体が生き生きと働いている中に身を置いてこそのものであり、イエス様はそこに導こうとして私たち共に歩んでくださっているのです。

しかし、イエス様が仰るその言葉の内側に身を置くことは私たちにあって居心地のいいものではありません。それは私たちの弱さや愚かさや醜さがそこで露わにされるからです。まただから、そこで私たちはそうした私たちの負の部分、ネガティブな一面を克服しよう、克服したいと思うわけです。しかし、もちろん、私たちがそう思うことは、それ自体、とても大切なことでもあるのです。なぜなら、イエス様と共にあって私たちが十字架を見つめている以上、なし崩し的に何でもありということにはならないからです。けれども、そう思う私たちはそのと

きどこに立っているのか、また、どこに向かおうとしているのか、自分が気のすむところに向かおうとしているのか、おもうところに向かおうとしているのか、それとも、イエス様と神様が喜んでくださるところにしようとしているのか、つまり、自分の気持ちか、それとも御心か、そのどちらに立っているのかということでもあります。ありますが、そこで、私たちに求められていることが、自分の立ち位置を知るために御言葉の中に身を置いてみるということなのです。ですから、それは実際にやってみなければ分かるものではありません。ぐだぐだになろうが、ぐずぐずであろうが、イエス様のいますところに実際に身を置いてみるということ、それが肝心なところであるということです。けれども、それは、私たちに耐え難いことでもあるのです。まただから、私たちの考えや思いをイエス様に委ねて、ただそこに身を置いてみることを求められるのです。

ただし、それは、自分自身のプライドがひどく傷つくことであり、特に、功成り名を遂げたいと思う人々にとっては耐え難いことでもあるのでしょう。けれども、だからこそまた、地の塩、世の光として生きることは、そこで神の御名が崇められることとなるわけですから、イエス様が仰るように、その私たちの行いは人から見て立派な行いに見えることにもなるのです。こうして私たちの心に火が付いて、私たちは頑張ってしまうのですが、ところが、頑張りすぎるがあまり私たちは忘れてしまうのです。それは自分が弱いということ、そして、それを忘れた私たちは弱いことがいけないことだと、つまりはそれがために、私たちは、弱いことが悪いこと、不幸なことだと、そう思い込んでしまうのです。ですから、イエス様のお言葉を自分の外側に置いて、安全なところに身を置こうとするのはそういう私たちの真面目さが私たちをしてそうさせるということです。けれども、イエス様が私たちに望むことは、イエス様の前でお利口さんぶることではありません。それを私たちがいくら売り込んだところで、イエス様はいつも私たちと一緒にいるわけですから、あまたかたそう思うだけのことだからです。けれども、そうであるからこそまた、イエス様と私たちとの関係を、御言葉は家族にたとえて語るのです。

物事は私たちが考えたようには上手くいくものではありません。ほとんどが自分が思ったところとは違うところに連れ

て行かれてしまうものです。しかし、地の塩、世の光と言われていることも、そういうところで力を持つものでもあるのです。では、私たちがどうすればいいのか、それには、毎回同じことではありませんが、私たちが自分を見失わないために必要なことは、こころを御言葉に聞き、祈りを共に合せていくことです。つまり、御前に静まる時間を兄弟姉妹と共にするということです。こうしたい、こうしよう、その思いが強くなったとき、自分の気持ちや考えにおもねるのではなく、主の御前にしっかりと自らを置いてみる、そうすれば、「地の塩、世の光」という私たちの本性は、私たちの弱さゆえにその輝きを増すことになっていくのです。それは、その私たち共にいてくださっているのがイエス様であり、つまりは、この弱さに働きかけるものが神様の愛であり、イエス様の愛であるからです。まただから、この愛を知った私たちは、まさに「地の塩、世の光」としてこの世を資し、世を利するものとして用いられることになるのです。ですから、このことはつまり、それがキリストを頭とする教会に私たちがこうして生きているということであり、まただから、「地の塩、世の光」と語られている言葉の真実を、そのように弱さを抱えた私たちは味わい知ることになるのです。

ですから、「緊急事態宣言」が発出されるこの時、改めてそのことを皆さんには大事にして頂きたいと思うのです。ただし、それは、一人で、一人だけで、ということではありません。主にこうして集められ、共に御言葉に聞いている私たちは、それぞれの顔を思い起こしながら祈ってくれている兄弟姉妹がいるのです。その一人ひとりの顔を思い起こし、祈りを合わせるのが私たちでもあるのです。それゆえ、それが私たちに求められているのはコロナ下だからということではありません。それをこれまで長く続けてきたのが私たちであり、それは戦火の中にあっても、一人病床のベッドに伏しているときも、途絶えることなく続けられたものが御言葉の分かち合いであり、祈りでもあるからです。ですから、その同じことを変わらずに続けていく、主にある平和、主にある安息は、御言葉を分かち合い、共に祈りを合わせる私たちの中で実現していることなのです。祈りましょう